

しん 秦・紀元前 219 年

(教科書 14 ~ 17 ページ)

概要・特徴



秦の始皇帝^{しこうてい}の命を受けて山東省^{さんとう}にある泰山^{たいざん}の山頂近くに建てられた頌徳碑^{しょうとくひ} (徳をたたえる碑)。秦の宰相・李斯^{りし} (生年不詳～紀元前208年)の書と伝えられている。

始皇帝は、紀元前221年に中国を統一した後、全国を巡遊し、天と地に即位を知らせ太平を感謝する「封禪」^{ほうぜん}の儀式を復活させた。一連の巡遊・封禪で建てられた7基の頌徳碑の一つが「泰山刻石」である。前半は、始皇帝の治世の秩序正しさや正当性をたたえる内容が記され、後半は、始皇帝の死後、その功績を正しく後世に伝えるための方策について臣下が交わしたやり取りが追記されている。元は220字程度が刻されていたとされるが、倒壊・火災などをへて、現在はわずかな残石に10字が残るのみである。残石は、泰山の麓にある岱廟^{たいびょう} (泰山を祀る建物)に保存されている。

縦長の字形や均一な太さの線、厳密な左右相称の構えなど、小篆^{しょうてん} (始皇帝の定めた公式書体)の典型を見ることができる。洗練された書法であり、権威の大きさを感じさせるような堂々とした篆書である。

作者について

李斯^{りし}は、楚の上蔡^{じょうさい} (河南省)の出身で、字は通古^{あざな ふうこ}。秦の始皇帝の即位後、信任を得て丞相^{じょうしょう} (現在の首相)となった。文字の統一をはじめ、始皇帝の行った統一事業の主なもの、李斯の建議によるものであったという。

篆書の成立・時代背景

現在最古の漢字とされる殷代の甲骨文から秦代の小篆までを総称して篆書という。

戦国時代の覇権争いに勝利し中国を統一した秦の始皇帝は、中央集権制を敷き、文字、貨幣^{どりょうこう}、度量衡 (長さ・容積・重さ)などの統一を行うことで、支配の徹底を狙った。それまで各地で独自に展開していた文字を大幅に整理・簡略化して統一し、始皇帝が公式書体として定めたものを小篆という。「泰山刻石」も、この小篆で刻されている。